琉球大学学術リポジトリ

ラン栽培のあらまし (3)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 健次, Uesato, Kenji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21118

第2表　年令別・性別・食品群別・摂取量のめやす

		穀　類	いも類	砂　糖	油　脂	豆類とその加工品	魚・肉・卵	牛乳・小魚海草	緑黄野菜と果物	淡色野菜と果物
30代	男	470	90	25	15	80	180	90＋10	100	250
	女	370	80	20	10	80	130	90＋10	100	200
40代	男	450	90	25	15	80	160	90＋10	100	250
	女	360	80	20	10	80	120	90＋10	100	200
50代	男	430	90	25	15	80	140	90＋10	100	250
	女	350	80	20	10	80	110	90＋10	100	200
60代	男	410	80	20	10	80	130	90＋10	100	250
	女	310	70	20	10	80	110	90＋10	100	200
70～	男	340	70	15	10	60	110	180＋10	100	200
	女	270	70	15	10	60	100	180＋10	100	200

の面で工夫をし，消化し易いようにして食べたいものです。

4. 脂肪はなるべく植物油のかたちで摂りましょう。老人の場合消化液の中では脂肪に対する消化酵素が衰えるので，油っこいものはある程度控えめにしたいものです。

5. 食塩のとりすぎはさけましょう。味覚の中では老人でもすっぱいもの，苦いものは比較的よくわかりますが，辛いものに対する感覚がにぶるといわれています。したがってつい塩辛いものを多く食べがちですから，注意しなければなりません。

6. 水分は充分とること。年をとるとのどのかわきを感じることがにぶくなるため水分のとり方が不足しやすいので注意しましょう。

7. 白米をたべると短命になるというのではなく，白米を食べすぎ，副食の摂取をおこたる事が悪いのですから，主食はひかえめにしおかず特に野菜類をたくさん食べるようにしましょう。

さて，私共の毎日の生活では，何事につけてもからだが資本で，そのからだを作るのは食物なのです。家族の幸福のためにも又社会に役だつためにも毎日の食生活によく気をくばり健康で長生きしたいものです。

（尚　弘子）

ラン栽培のあらまし（3）

3. 生態的特性

前号では形態面の特性について大まかに述べましたが，次は生態面からの性質をまとめてみたいと思います。

a. 日照及び温度との関係

洋ランは熱帯亜熱帯原産のものが多いので生長適温は20～30°Cの範囲がよく，それ以下になると生長速度がにぶってくる。しかし中にはデンドロビュウム・ノビル系のような高地原産のものは熱帯産であっても低温（13°C）で生育する。日較差は他の植物と同じように大きい方が好ましいようである。光に対しては特に陽地性のランでは日焼けを起さない範囲内で十分に与えるべきである。勿論日よけ過剰のものを急に日なたにさらすと葉に損傷を与えるのは当然である。一般に弱い光線になれた葉は皮層が薄く軟弱で病虫害に侵されやすく、花つきが悪い。逆に強い光線に当てると花の色彩が鮮明になる。

日焼けは光線の強さと時間の長さで相関的にきまってくる。沖縄の夏季の光線は強すぎるので日覆いが必要だがしかし上記の理由で朝夕の柔らかい光には当てた方がよいと思われる。

植物の生長には栄養生長と生殖生長があり、それぞれ異った環境条件を必要とするのは当然である。一般に栄養生長には長日と高温がよく生殖生長（開花）には低温と短日が必要である。しかし種類によってかなり差があり一がいに云う事はできない。第1表はローター氏によって明らかにされた生長と開花に対する日照時間と温度の影響の要約です。

第1表　生長と開花に対する温度と日長の影響

種類	最低温度		長日の影響	短日の影響
	生長	出蕾		
	°F	°F		
C・ガスケリアーナ	55－60	55	開花を弱める	55°で開花を誘う 65°で生長を刺激する。
C・ワルセウイッチ	55－60	55	開花を妨げ生長を刺激する。	55°で花芽分化を誘う
C・ラビアータ	60	きまらない	65°で生長を刺激し開花を妨げる。55°で開花を遅れさせる。	花芽分化を誘う
C・モッシェー	60	55	生長を刺激し開花を妨げる。	55°で花芽分化を誘う
C・パーシバリアーナ	60	きまらない	生長を刺激し開花を妨げる。	花芽分化を誘う
C・トリアネー	60	きまらない	開花を妨げる。	花芽分化を誘う
シンビジウム	55	45－55	生長を刺激する	草本を弱くする
D・ファレノプシス	65	きまらない	生長と開花を遅れさせる	生長を促進させ花芽分化を誘う
D・ノビレ	55	55	花芽の発達を促進させる	草本を弱くする
P・アマビリス	65	さまらない	花芽の発達を遅れさせる	花芽の分化を誘う
P・シレリアーナ	65	きまらない	花芽の発達を遅れさせる	花芽の分化を誘う
Pa・インシングネ	55－60	55	無影響	無影響

注）Cはカトレヤ，Dはデンドロビュウム，Pはファレノプシス，
Paはパフィオペジラム（シプリペジウム），温度は°F

上の表からローター氏は次の点を指摘しています。

1）　短日はすべてのカトレヤの種類とデンファレ，ファレノプシスの花芽分化を促進し長日は開花を完全に妨げるか抑制させる。更にある種類では温度が強く影響してくる。C・ガスケリアーナは 13°Cで抑制させられC・ラビアータは 18～21°Cで完全に停止させられる。

2）　ある種類では短日による促進効果は温度によって変化する。C・ガスケリアーナ，　C・ワルセウイッチ，C・モッシェーは13°C においてのみ短日は開花を促進し，18°C においてはいかなる日照時間でも開花はかなり抑制されるか，あるいは完全に停止させられる。

3）　花芽分化を起させるための低温はランの種類によって異なる。 デンファレとファレノプシスは 16～18°C，C・ガスケリアーナ，C・ワルセウィッチ，C・モ

ッシェー，D・ノビル，パフィオペジラム・インシグネは13°Cで花芽の分化が起る。

4）　低温に反応する種類では，花芽分化は日照時間に影響されない。シンビジウム，Pa・インシグネ，D・ノビル等は日照時間に関係なく13°C の最低温度で花芽分化が起る。これらの種類は 18°C の温度では開花せず，連続してこの温度下に置いてあるものでも 13°Cの温度に合せると直ちに花芽分化を開始する。

5）　一般に高温は栄養生長を刺激し，年間一つしかバルブを作らない種類でも，2個のバルブを作るようになる。その結果生長の正常な周期に狂いが生じ普通でない時間に開花するこれはC・ワルセウイッチにはっきり見られる。C・ワルセウイッチはしばしば16～18°C の温室で他の種類といっしょに栽培され，開花を見ないのが多いが，これは花芽分化が直接に妨げられ，同時に栄養生長が促進されて，正常な生長周期が変えられているからである。

デンドロビュウム・ファレノプシスでは次のように述べられている。①短日は温度に関係なく花芽の分化を促進する。18°C で短日の下に植物を置きつづけると、少くとも年2度新旧両バルブから花芽を生ずるが長日下では開花は遅れる。② 13°C程度の低温では日照時間に影響なく短日と同じような結果をもたらす。高地原産のD・ノビル系では 12°Cの低温で花芽分化が促進される。普通なら前者は初秋後者は初冬に開花するものだが，18°C の短日下に置くとそれとは異った時期に開花する。長日下ではしばしば開花の遅れが見られ，F・シレリアーナでは夏に上部から若枝の出現が見られた。

温度に関係なく，日照時間にのみ反応する種類の開花期を調整する事は極めて簡単である。遅く開花させるためには普通の花芽分化期の前に長日を与えればよいし，早く開花させるためにはこの時期の前に短日を人工的に与えればよい(以上ウイズナー著 ランとその科学より)。

尚カトレヤ類では人工的な開花調整も行なわれているが，品種の分化が多くレリアやブラッサボラ，ソフロニチスとの間の属間雑種もかみあわせると，人為的な操作を加えないでも年間を通じて花を見る事ができる。
冬咲きではトリアネー系，春咲きはモッシェー系，夏咲きはギガス系，秋咲きはラビアータ系などがよく知られている。

（上　里　健　次）